教育活動活性部会　令和４年　5月　24日(火)
出席者
　委員：市川　慎二、萬谷恵三子、新井　好美、佐藤　豊
　職員：佐々木悦郎、五反田淳、田中　成美
　事務局：内藤　学（副校長）

副校長：引き続き、教育活動活性部会よろしくおねがいします。このあと佐々木から卒業した生徒の進路状況の報告があります。お願いします。

佐々木：資料をご覧ください。過去３年間の状況です。45・46・47期生になります。45期生は、大学への進学が43%にとどまってしまいました。原因は、女子の比率が高い学年で、女子が専門に流れてしまったと考えています。46・47期生に関しては、50%を超えてきています。令和３年度は54%になりました。入学時の進路希望調査では6・7割が大学進学を希望しており、その数字に近づいてきていると考えます。以下の部分は合格者の延べ人数になります。大学に進学した生徒の入試制度については、169人のうち指定校が100名、AO自己推薦が18名、公募制が5名、一般受験が46名で合格し進学しています。延べ人数なので1人の合格が複数回含まれますが、昨年度は自分なりに挑戦できたと見ています。また何年か前にAge28を立ち上げました。行ける学校ではなく、行きたい学校へ指導してきた効果が、少しずつ出てきたと思います。

副校長：何か質問ありますか。

新井：一般で行く生徒が増えたのはいいことだと思います。そういうところにチャレンジしていきたいのは保護者の気持ちでもあります。

佐々木：進路室の利用状況について話しますと、今年度は1年生が使うようになっており、使用頻度も高いです。部活とともに学習への意識も高まってきていると感じます。

萬谷：今の時代は指定校がほとんどですか。他の高校もそういう感じですか？

佐々木：進学校ではそうではないですが、中堅校以下は指定校推薦を希望する生徒が多いです。本校への入学生も部活を頑張りたい、その次に学校の成績をとっていきたい、そうして進路実現に向かっていくという傾向にあります。最終的に指定校が多いのは、結果として増えています。またコロナの影響や受験料のこともあり、受験の日数をしぼったりする傾向があります。

副校長：今年度の部活動加入率は53%です。以前は60%くらいありました。全盛期は80%ほどあったようです。

田中：外部でやっている生徒もいるので、一概には言えないかもしれません。

新井：自習室に参加している生徒は部活動生ですか。

佐々木：そこはリサーチしていませんが、テストの1週間前くらいから増えてきている様子です。そこで日頃の勉強をとりもどそうとしているのではと考えています。

萬谷：国公立を希望する生徒はいますか。

佐々木：そこまで手広く挑戦する生徒はいません。国公立を希望する生徒はいますが、受験勉強が間に合わないのが実情です。

副校長：令和3年の生徒がそれに当たります。他校もそうですが、推薦で早く決めたい生徒が多いです。担任が一般に促そうとしても、本人はなかなかそっちに動きません。中堅校以下は評定から大学を目指しがちです。コロナ禍も含め、そういう生徒が多くなってきていると感じます。

校長：学校としては希望する学校で頑張ってもらいたいが、一般と推薦の学力差が激しいです。以前は引退してから塾に行ったりしていました。本校の課題としては、終点が大学入試ではなく入学してからだと思うので、そこの部分を進路グループの方で検討してもらっています。現在、1年生や3年生でスタディサプリを採用しています。1年生はそれをうまく活用しながら勉強しているのではないかと思います。塾に行けない生徒に向けて少し動いているので、そういう生徒が受験するようになってほしいです。

副校長：それ以外どうですか？田中先生はありますか。

田中：10年後に世の中に出てからが大事だと思います。単に教えるのではなく双方向での学び合い、自分の答えをどういうふうに出すのかを重視しています。またギガスクールにおいてこれから身に着けないといけない力を、生徒とともに学び合い、共に成長できたらと考えています。英語に関して言えば、大学入試も変わっているので、そういった生徒に対応できるよう授業の工夫をしています。

副校長：五反田先生どうですか。

五反田：中学校では朝読書していますか。これからは読解力を高めていかないと実績も上がっていかないので、読解力を上げていくべきだと思います。共通テストの数学の問題を見ると、計算よりもそこにたどり着くまでどういうふうにもっていくか、読み解く力を身に着けていかないといけないと感じます。

佐々木：国語の授業の中でも、本を読んでいる生徒は限られます。漫画も読んでいない生徒がたくさんいます。簡単に流れがわかるアニメで済ませてしまいます。国語のテストでも読解力の部分については点数が悪いです。論理思考的な能力は今追いついていない現状にあると思います。

副校長：中学校はどうですか。

萬谷：中学でも、意味がわからないから読めない生徒が多いです。国語の授業時間も減っているので、そういう力を身につける時間が少なくなっていると思います。考えることが大事な今、そういうことを主体的にやっていきたいです。対話的な学びは進んでいるので、そのへんも絡めて工夫が必要な感じですかね。学力差も出ていると思います。

五反田：朝のニュースで「高学歴か低学歴かは所得には関係ない」とあり、なるほどなと思いました。「子供に考えさせる、親が子供にどのように接するか、つまり・・・とかが出てくる家庭は一生懸命やる子が多い、親とのやり取りが多い家庭は自分で学んでいく」と言う内容でした。読む力は想像力が大事なので、今の生徒は「これはこう」とかを考えられなくなっています。本校の生徒も力あるのに伸ばしきれていないという感じです。1年間見ていて私が心がけていることは、話しかけ、「終わりました」という発言に対して「良い返事だね」と伝えることです。彼らはそれでとても喜びます。普段褒められていないのかなと感じます。やったことを観察して、叱るのではなく、いいことをどんどん褒めるようにしています。そういう中で深い学びができるといいと感じます。

副校長：田中先生はどうですか。

田中：今年で3年目ですが、今まで導かれていた生徒なので、自分たちでやらなきゃいけない難しさが出ていると思います。褒められていない生徒が多い中でそれは大事で、彼らの受動的な姿勢を変えてあげるべきだと感じます。与えられすぎてもダメですし、逆もダメです。あえて失敗をさせてあげ、軽症で済むようにセーフティーネットを貼ることが我々の仕事だと思います。そこからの立ち上がりを支援し、自尊心を高め、引っ張っていけるような関係を作り、学校全体が輝くのが大事です。生徒をどう輝かせるかを意識してやっていますが、全体としてはなかなか難しいです。そこのすり合わせ、学校としてブレないようにしたいです。

副校長：佐々木先生はどうですか。

佐々木：中学校のときに成功体験をしていないと思っているので、高校で自身が持てる体験をして、挑戦への気持ちを向けさせるようなことを考えていかないといけないと思います。

萬谷：旭高校はスポーツもやっているから、勉強だけでなく、非認知能力も大事だと思います。それも学力に大きな影響を与えるので、学校行事を減らさないという方針は、今結果が出なくても、何年か先に学力以外の部分で出ていくと思います。そういうところで能力を伸ばすことで、色々な場面で出ていけるようになるのではないでしょうか。頭がいいことだけが価値ではないです。課題を解決できる能力が大事です。学校行事を減らさないでやっていくというのはそういうことだと思うので、いいと感じます。

新井：五反田先生のおっしゃるとおり、保護者として、叱ったあとにフォローもしてもらえると、子どもたちも感じるところがあるのではないかと思います。今感じているのは、共働

きが増えていて、家庭での会話が減りつつあることです。まず第一に、1日の出来事など、家庭で会話を持つことが大事だと思います。当たり前だと思いますが、できない家庭が多いです。そこからがスタートだと思います。学校でのサポートはいいと思います。

五反田：コロナの前後では集まる機会が少なく、情報共有ができていないので、悩み相談とかをできたらいいなと感じています。状況に応じながらやれるといいですね。家庭の状況もありますが、様々な悩みを抱えているので、親同士で関係を持つことも大事だと思います。コロナが収まれば、そういうこともやりたいです。1年生は6月の懇談会で、できたらいいなと思います。

副校長：他は大丈夫ですか。予定より早まりましたが、貴重な意見は学校の方でも検討していきたいと思います。主役は生徒なので、生徒のために何ができるか考えてやっていきたいです。今後とも宜しくお願いします。ありがとうございました。